

『ドクトル・ジヴァゴ』における「ユーリ・ジヴァゴの詩」試論 ——イエス・キリスト像を中心に——

李 博聞

0. はじめに

ボリス・パステルナーク(Борис Леонидович Пастернак, 1890-1960)は論争に包まれた詩人であり、彼の作品は謎めいている。後期作品の『ドクトル・ジヴァゴ』¹ (Доктор Живаго, 1957)は「神秘的な小説」ともよばれた。² 青年時代のパステルナークの未来主義宣言「黒いゴブレット」(Черный Бокал, 1915)は既に芸術における「対蹠的両極」(два противоположных полюса)——叙情性と歴史性を示していた。しかしながら1910年代の未来派詩人パステルナークは、叙情性を重視していた。だが1944年に書かれたエッセイ「ショパン」(Шопен, 1944)を節目として、パステルナークは再び感受性と責任感という対立を重視するようになり、個人の歴史を繊細な知覚で芸術化する「経験的内容」(Erfahrungsinhalt)として表現するようになった。³ ソ連古代文化研究者、彼の従妹のフレイデンベルクが「もう一篇の創世記」と読んだ、第二次世界大戦後の『ドクトル・ジヴァゴ』はその代表的なものである。⁴

個人の歴史の文学的形象化である「経験的内容」の一方で、パステルナーク後期の著作は著しく宗教性を帯びている。ドイツの記者ルジェによるインタビューで、パステルナークは「ブルースト、トーマス・マンやジョイスを愛読していたが、ブルーストらの著作においては、あることが感じられない。それは——「聖なる閃光」(divine spark)という、芸術作品と超越性を繋げたものだ」と強調している⁵。パステルナークは彼が青年時代に愛し崇めたリルケと同様に、超越的な体験を求めながら、創作力の不死を究明しようとしていたのである。

『ドクトル・ジヴァゴ』という小説は、長きにわたって論争を引き起こしてきた。とりわけ、小説本編のみならず、その第17章「ユーリ・ジヴァゴの詩」においても描出されたイエス・キリスト像は、その解釈をめぐって、多くの議論を呼んできた。神学者にとって最も衝撃的なのは、小説の第2章におけるキリストに対する「強調された人間性、意図的な地方性」(подчеркнуто человеческий, намеренно провинциальный)⁶ という表現であろう。キリストは崇めるべき神ではなく、より人間的なイメージで表現されている。これは間違いなく正統的な教義と相対立する形象である。

『ドクトル・ジヴァゴ』に対して、キリスト教の観点から分析する試みは現在でも続いている。『パステルナーク:生涯と芸術』(1989)の著者マラークは、その代表的な観点を次のようにまとめている。①イタリアのフロリ

¹ パステルナークからの引用や参照は、*Пастернак, Б.Л. Полное собрание сочинений в 11 томах. М.: Слово / Slovo, 2004-2005.* による。また、翻訳は執筆者自身による。

² *Смирнов И.П. Роман тайн «Доктор Живаго». М.: Новое литературное обозрение, 1996.*

³ *Guy de Mallaac, Boris Pasternak. His life and art. Norman: University of Oklahoma Press, 1981, p. 346.*

⁴ *Пастернак Е.Б. Борис Пастернак: материалы для биографии. М.: Советский писатель, 1989. С. 603.*

⁵ *Mallaac, Boris Pasternak, p. 218.*

⁶ *Пастернак. Т. 4. С. 45.*

ディ神父は、この小説が神としてのイエス・キリストを冒瀆したと指摘し、「強調された人間性」であるキリスト像に猛反発した。②亡命ロシア人の神父コンスタンチンフも、「この小説にはロシア正教に関することが一切ない」と批判した。③一方、アメリカの評論家ウィルソンは、神学的なアプローチを通じて小説全編を分析した。しかしパステルナーク本人はウィルソンの分析を否定し、「無神論者」としての自分の立場を述べながら、神学の範囲外の超越性を強調している。⁷

『ドクトル・ジヴァゴ』を論じた研究は膨大な量にのぼるが、その第17章「ユーリ・ジヴァゴの詩」を中心とした論文は著しく少ない。現代ロシアの文学研究者のヴラソフは『パステルナークの「ユーリ・ジヴァゴの詩」』（2008）において第17章の詩の数篇を分析し、それらと小説本文との関係を論述したが、キリストの形象についての考察はほとんど行っていない。⁸

アメリカのロシア文学研究者ジョン・ジヴェンスは『ロシア文学におけるキリスト像』（2018）において、『ドクトル・ジヴァゴ』におけるキリスト像を「愛」のテーマと結びつけ、「強調された人間性、意図的な地方性」を章のタイトルで用い、小説で論じられた「受難」（страдание）と「情熱」（страсть）との語源上の関係を手掛かりとして展開した。また、ジヴェンスはソロヴィヨフの理論を通じて、キリストージヴァゴの集合体におけるエロス（情熱的な愛）とアガペー（聖なる愛）を区別している。⁹

本稿は『ドクトル・ジヴァゴ』の第17章の連詩「ユーリ・ジヴァゴの詩」を主な分析対象とし、一連の詩作品におけるイエス・キリスト像を考察する。ただし、本稿は神学的なアプローチを主軸とするつもりはない。ウィルソンに対するパステルナークの「自分の創造は神学の範囲外」という反論を踏まえつつ、まず、第1章では、連詩とそれらにおけるイエス・キリスト像の分析に着手する。すなわち、神学を主軸とする見方から距離を置いて、生存者としてのイエス像について論じる。第2章では、「人間的な」イエス・キリスト像の側面を分析し、マルティン・ハイデッガーの諸概念を補助線として、生存者としてのイエスを解明していく。第3章では、歴史化されたキリスト像という議論を展開する。ユダヤ人の宗教哲学者のマルティン・ブーバーのキリスト教信仰における二重性の概念を導入し、「歴史化」という概念について説明する。「受難週」と「八月」の2篇のテクスト精読を通じて、典礼学とパステルナークの自伝的な材料を参照しながら、「歴史化」という過程と生死に対する芸術の作用を究明する。あらかじめ筆者の結論を提示するなら、パステルナーク、特に「ユーリ・ジヴァゴの詩」におけるイエス・キリスト像は、死すべき運命にあるものとしてのイエス像と歴史化されたキリスト像とが、神学的な次元ではなく、詩学の次元で連結された総合的な形象であると考えている。

⁷ Guy de Mallac, Pasternak and Religion. *Russian reviews*, vol. 32, no.4, 1973, pp. 360-361. 「神学範囲外」と詩人自身がいう非神論的な視点とパステルナーク後期作品に溢れている宗教観は矛盾しているように見えるが、彼が提唱している「芸術における現実主義」はそれを理解する鍵となるだろう。それについての具体的な議論は、パステルナークの「現実主義」と歴史意識に焦点を当てた別稿で論じる予定である。

⁸ Власов А.С. Стихотворения Юрия Живаго. Б. Л. Пастернака: сюжетная динамика поэтического цикла и «прозаический» контекст. Кострома: КГУ, 2008.

⁹ John Givens, *The image of Christ in Russian literature: Dostoevsky, Tolstoy, Bulgakov, Pasternak*, DeKalb, Ill.: Northern Illinois University Press, 2018.

1. 三位一体のイエス・キリスト像

キリスト教の中核としての「キリスト」はいつも神学者たちの論争の中心に位置する。「キリスト」のイデーをめぐる展開された無数の信条(символ веры)や教義の中で、最もよく知られているのは「三位一体」(Троица)と「受肉」(богочеловечие)であろう。「三位一体」という教義では、「父」と「子」と「聖なる霊」はいずれも等しい位格である。そしてイエス・キリストは、この3者と常に等価である。言い換えると、キリストは「父」でもあり、「子」でもあり、「霊」でもあるのだ。「ヨハネによる福音書」の冒頭部の「太初に言(ことば)があった。その言は神にあった。その言は神であった。[……]言は肉となって、わたしたちの間に宿られた」¹⁰とあるように、キリストは言、つまりロゴスによる肉体のある人間だ。「三位一体」の3つの位格を、便宜上、「父・子・霊」という3つのイメージとして考察してみよう。

1. 1. 「父」という稀薄なイメージ

「父」のイメージは「ハムレット」と「ゲッセマネの園」にしか現れていない。「ハムレット」における主人公は、役者—キリスト—ハムレットの集合体である。集合体を構成するこの3者は、役者がその演目における役柄、キリストが受難及び一連の奇跡、ハムレットが復讐、という各々の役目を果たさなければならない。その役割を定めたのは、役者のいう「あなた」、ハムレットの死んだ父王、そしてイエスにとっての「父」である。

Если только можно, Авва Отче,
Чашу эту мимо пронеси.

もし可能であれば アッバ、父よ
この盃を取り除きたまえ ¹¹

この2行の詩は「マルコによる福音書」における「そして『アッバ、我が父よ！あなたはなんでもできる。私の側からこの盃を取り除けたまえ。しかし私の望みでなく、あなたの望みによって』¹²のパラフレーズである。福音書に表現されているのは、一方で「父」の全能と強力、他方で「子」としてのイエス・キリストの謙遜、ないし完全なる従順である。しかし、パステルナークの詩に姿を見せているのは、もう一人のキリスト

¹⁰ 「ヨハネによる福音書」(1:1-14)。本稿はシノド聖書を参照する。聖書からの引用は、Библия. М.: Российское Библиейское Общество, 2005. による。また、翻訳は筆者自身による。

¹¹ Пастернак. Т. 4. С. 515. 「ユーリ・ジヴァゴの詩」の翻訳にあたって、次の既訳を参考にした。ボリス・パステルナーク／江川卓訳、『ドクトル・ジバゴ』(Ⅱ)、時事通信社、1980年。ボリス・パステルナーク／工藤正廣訳、『ドクトル・ジヴァゴ』、未知谷、2013年。

¹² 「マルコによる福音書」(14:36)。

だ。福音書の「あなたはなんでもできる」の代わりに、パステルナークのイエス・キリストが祈ったのは「もし可能であれば[……]この盃を取り除きたまえ」という譲歩の文だった。この文を通じて、完全な従順の口調が抑えられ、イエスの生き抜こうとする願望が強調される。ここから、強いられた務めから逃れて生き抜くという基本的な人間の生きようとする意志が強く感じられる。それは「すべては神の意思通りになると知ってはいるが、自分の意思をあえて主張する」というに過ぎないが、とはいえ、その立場はもう「運命に掴まれた客体」から「自分の意志を持つ主体」に転じている。パステルナークのイエスは、「父」の下にはあるが、より強い自己意識や自己意志を示している。

「ハムレット」における主人公のイメージの集合体では、ハムレットもキリストのように、「父」の影響のもとにある。ハムレットの運命は、父の幽霊から「真実」を聞いた後、完全に、不可逆的に変わった。彼は復讐を企て、思索し、存在論的な決定を出した。「生きるべきか？ 死すべきか？ それが問題だ」——パステルナークの詩においては、これは「舞台に出るべきか？ 出ないべきか？ それが問題だ」ということになる。役者—キリスト—ハムレットの目の前にあるのは、ただ一つ、定められた、一方向的な「生」¹³ だけだ。

Но продуман распорядок действий,

И неотвратим конец пути.

とは言え幕の順番は考え抜かれたもの
道が終焉に至るのは避けられない¹⁴

ハムレットの場合、復讐と死の全ての展開が死んだ父の幽霊の言葉から生じたものだ。キリストの場合は、聖なる父に定められた自己犠牲の宿命だ。役者が「この役」を演じるのも、引き受けたものであるからだ。¹⁵ 役者、キリスト、ハムレットの3者は皆、自分の意志でこの運命を受け止め、終末の重さを担うことを決めた。存在の正念場で躊躇い、生の本能によってその運命の力に逆らう意志を示すのである。役者は「ハムレット」の第3連に書かれているように「今回だけは私を役からはずしたまえ」と反発している。ハムレットは「生きるべきか死すべきか」という疑問の声を上げた。「子」としてのキリストは「もし可能であれば、この盃を取り除きたまえ」という願望を祈った。「ハムレット」における「父」は最上の権威を握ったが、強い主観的意志を示した叙情的主体にとっては、より客体的な存在に見える。この客観的に定められている運命というのは、まさ

¹³ *Пастернак*. Т. 4. С. 515.

¹⁴ *Пастернак*. Т. 4. С. 515.

¹⁵ 同じく役者の場合、演技という行為は「舞台」の向こうからの呼び声によって要求されたものだ。「ざわめきはおさまった」(Гул затих)とあるように、これはもともと観衆の願望、意志の表現である。それゆえ、役者が論議的に動き出した(「私は舞台に出た」(Я вышел на подмостки))ように見えたとしても、実のところそれは観衆からの要求に応じた結果で他ならないのである。*Пастернак*. Т. 4. С. 515.

にギリシャ悲劇や神話のキーコンセプト「アナンケー」(ανάνκη)ではあるまいか。この「アナンケー」こそが、「父」の正体であろう。¹⁶

「ゲッセマネの園」では「父」のイメージに2回言及されている。それは、ゲッセマネで祈禱しているイエス・キリストを描いたものだ。「彼は血の汗で父に祈った[……]果たして翼ある天使の軍勢を／ここにいる私に差し出せないともいうのか？」¹⁷ここはまた福音書からの引用である。「私が今、我が父に祈れないとも思うのか。私が祈れば、彼は十二軍団以上の天使を送ってくれるのだろう」¹⁸ということである。聖書原文におけるイエスの「できない」(Я не могу)という自己否定は、パステルナークの詩においては「ここにいる私に差し出せないとも言うのか」(не снарядил бы)という質問になっている。パステルナークのイエスは仮定の条件のもとで可能となるはずの未来を想像していて、「父」に対する疑いや自分の生き延びる意欲を曖昧に表した。これは些細な違いだが、この点においてキリストの主体が示唆されている。マタイによる福音書のコンテキストでは、イエスの「できない」は「父」の「できる」と対比され、自分自身が「父」からの拒否を認めて、運命を受け入れている。しかしながら、パステルナークのイエスは自分を否定せずに、生の意志を顕しながら、神なる父に質問した。「けれども生命の書はそのページに近づいた／一切の聖なるものより貴いページに」¹⁹——生命の終点で、叙情の主体は彼の役目と運命に頭を下げるのだ。キリストにとって、「父」というイメージは触れえぬもの——超越性、即ち別の次元において存在するものである。そのことは、「ハムレット」と「ゲッセマネの園」における3箇所「父」への言及にはっきり述べられている。ただ3箇所に姿が現れた「父」そのもののイメージは、小説本文においてもそうであるように、ほとんど見出されない。²⁰

1.2. 「霊」のイメージの不在

次に、「霊」のイメージを「ユーリ・ジヴァゴの詩」に探してみるが、一語たりとも明白な言及がないため、事態はより複雑である。ニカイア・コンスタンティノポリス信条における「聖霊を、いのちを創造する主を(私は信じる)。聖霊は、父から出て、父と子と共に礼拝され、栄光を受け、預言者を通して語られた」という文に拠

¹⁶ 「アナンケー」とは、ギリシャ神話における女神の名前であり、必然性や宿命を表すものである。また、それは古代ギリシャの宗教であるオルフェウス教とも深い関連があるとされる。「アナンケー」についてのパステルナーク自身の言及はイギリス詩人スティーブン・スペンダー宛ての書簡(1959)に見られる。この書簡において、パステルナークは自然と現実生活に対する自分の態度を詩的に解釈した。「アナンケー」、すなわち「客観性」と「自然の規則や道徳的条件」が届かない次元に置かれている一方、芸術の技法と生活の経験の共通している「確信的類似性」(верное сходство)が追求されている。Пастернак. Т. 10. С. 523. パステルナークの世界観における「客観性」と届かない次元である「超越性」の関係は、まだ検討する余地があると考えられる。

¹⁷ Пастернак. Т. 4. С. 547-548.

¹⁸ 「マタイによる福音書」(26:53)。原文は次の通り。“ Или думаешь, что Я не могу теперь умолить Отца Моего, и Он представит Мне более, нежели двенадцать легионов Ангелов? ”.

¹⁹ Пастернак. Т. 4. С. 548.

²⁰ 「父」は「父親」と「父の神」という二つの意味を有するがゆえに、両者に通じるものが「イエス・キリストー父の神」と「ドクトル・ジヴァゴージヴァゴの父親」という二つの形象に見出されるのだろう。『ドクトル・ジヴァゴ』における「父」の形象については、次の研究を参照されたい。梶山裕治「パステルナークの作品における稀薄な父親像」『SLAVISTIKA:東京大学大学院人文社会系研究科スラヴ語スラヴ文学研究室年報』25号、2010年、88-94頁。

って、「霊」は「いのちを創造する主」(Животворящий)と見做すことができる。²¹ 「いのちを創造する主」(Животворящий)という表現に近いのは、「三月」における「万物に命を与えるもの」(живитель)と「原因となるもの」(виновник)だ。

Настежь все, конюшня и коровник,
Голуби в снегу клюют овес,
И всего живитель и виновник, —
Пахнет свежим воздухом навоз.

全てがすっかり開けばなした 厩舎も牛小屋も
鳩たちは雪の中で燕麦を啄んでいる
厩肥——万物に命を与えるその原因となるものは
新鮮な空気に匂っている²²

この詩では、春がきて、人々が労働を開始して、厩肥によって大地が肥えるようになる。強いて言えば、この一連の描写は「全知全能の主」やキリスト教に基づくというより、アニミズムや汎神論に近い。擬人化された神より、自然に対する愛がより激しく溢れている。²³ したがって、「霊」に当たるイメージは殆どないと言って良いのである。

1. 3. 顕著な「子」のイメージ

三位一体の視座から見れば、「キリスト像」に関連して最も重要なのは言うまでもなく「子」、即ち「キリスト」自身である。単にキリストを三つの位格から分離するためなら、キリストが神ではなく、キリストの行動に神聖性が含まれていないことを証明すればよかろう。聖書を解釈するとき、キリストが有する神聖性は主にキリストが示した奇跡を通じて証明される。「ユーリ・ジヴァゴの詩」における奇跡の描写は、「奇跡」と「禍々しい日々」にある。

「奇跡」では、イエス・キリストが無花果の木を呪詛することが述べられている。この呪詛は神学家たちの解釈でも難解なものであるが、主に2つの理由があるとされている。第一に、無花果の木は3月に芽生え、少なくとも5月以後に実が出るため、4月に無実のイチジクの木を見ることは何よりも通常かつ自然な

²¹ ニカイア・コンスタンティノポリス信条の原文は次の文献に依拠する。Сахаров Н.Н. Христианская вера и христианская жизнь. Ч. 1. Париж: изд. прот. Н. Сахарова, 1939. С. 137.

²² Пастернак. Т. 4. С. 516.

²³ バステルナークの自然、原始主義や人間の身体的労働に対する感知力や情熱については次を参照されたい。Mallac, Boris Pasternak, pp. 288-295.

ことである。キリストはこの4月の時節で何の異変もなく神の意思のままに成長している植物を見ただけで、無花果の木など絶滅してしまえ、といった呪詛の言を吐いたのである。神の創造した被造物を呪うことは、間違いなく神の意志に逆らっている。第二に、悪魔の試練を乗り切って、40日も食事をしないこともできるキリストは、悪魔に対して「人はパンだけで生きる者ではない。神の口から出るあらゆる言葉で生きるのだ」²⁴ という返事をした。したがって、キリストはいくら飢餓に遭っても、神による被造物を呪うわけにはいかない。教会の説明によれば、無花果の木に降った呪い(奇跡)は「寓話」(parabole)で、聖書に書かれた「神の国はあなたたちから取り上げられ、それにふさわしい実を結ぶ民族に与えられる」に呼応している。「実を結ばない民族」である以上、神の国に住む資格を失い、消滅させられる結末しか得られない。無花果の木に降った裁きは、教徒と偽った異教徒に示した戒めであるというのである。しかし、パステルナークのイエスは、聖書の記載と教会の解釈とも異なっており、全く別人のイメージを表現している。

Я жажду и алчу, а ты -- пустоцвет,
И встреча с тобой безотрадной гранита.
О, как ты обидна и недаровита!
Останься такой до скончания лет.

わたしは喉が渇き空腹なのに お前は——徒花
お前と対面するのは花崗岩より陰気なのだ
嗚呼 お前は何という無礼かつ無能なものだ
年月の終末に至るまでこのままで居れ²⁵

詩人のテキストにおいて強調されているのは、生理的状態と客観的現実との巨大なコントラストである。このコントラストを原因に、イエスの中で失望と憂鬱が起きている。だからイエスは腹を立て、その怒りを自由に自然に生きている無花果の木にぶつけた。無花果の木が果実も何の利益ももたらしてくれないので、空腹に堪えられないイエスはそのままで飢えの苦しみを味わうことしかできない。そのため、無花果の木への呪詛が出てきたのである。この一連における「子」としてのイエスは「強調された人間性」を表現し、三位一体の神に内在する格と大きく異なっている。人間性が溢れている生理的欲求と感情がその証拠だ。後の一連で、パステルナークは「奇跡」について解説している。

Найдись в это время минута свободы

²⁴ 「マタイによる福音書」(4:4)。

²⁵ *Пастернак*: Т. 4. С. 541.

У листьев, ветвей, и корней, и ствола,
Успели б вмешаться закон природы.
Но чудо есть чудо, и чудо есть Бог:
Когда мы в смятении, тогда средь разброда
Оно настигает мгновенно, врасплох.

もしこの瞬間 葉や枝に 根や樹幹に
一分間の自由があるならば
自然の法が介入できるようになるだろうが
しかし奇跡は奇跡であり 奇跡は神である
私たちが狼狽しているところ その混乱の中
その奇跡が瞬きで 我らの不意を襲う²⁶

奇跡はキリストの要求に応じる神の回答ではなく、飢餓に困っていたイエスの混乱や焦燥感の最中に、予想外に現れた。パステルナークは、この一行によってキリストの持っていた全能の力を三位一体ではなく、単一である神に帰し、そのことによって、キリストの神聖性を否定しているのである。神が下した裁きは単一な神の力を証明していると同時に、イエスにおける人間性の溢れている呪詛は彼を三位一体の「子」の位相から分離したのである。

「奇跡」に書かれているのは福音書においてイエス自身が経験した奇跡であり、その描写は直接的で繊細なものである。一方、「禍々しい日々」における奇跡の描写は、カナの婚礼、湖面を歩んだイエス、ラザロの復活の3つの奇跡と同じように、それを見た人々の記憶に残り、福音書に書き留められた記述に基づいている。²⁷「禍々しい日々」には、刑場で磔の刑を受けていたイエスと、観客の視点から生きているキリストが同時に叙述されている。他者間で語られているキリスト像は、確かに新約聖書における「我が主イエス・キリスト」であり、三位一体の神であり、奇跡を行う聖者である。「噂」のキリスト像は既に歴史化された人物像であり、生存者として生きているナザレのイエスその人ではない。「禍々しい日々」の2つに分けられた描写は、「ユーリ・ジヴァゴの詩」におけるイエス・キリスト像の二重性を示唆しているのである。

以上、「ユーリ・ジヴァゴの詩」における「父」というイメージはごく稀に出現していることと、「霊」というイメージが殆どないことは明白である。「子」としてのイエス・キリストは主人公として書かれたが、徹底した人間性を表現していた。パステルナークのイエス・キリスト像は、正統教義の基礎としての三位一体から乖離し、時には異端のようにキリストの人間性が強調されている。パステルナークにおいては、「父・子・霊」という三

²⁶ Пастернак. Т. 4. С. 542.

²⁷ 「ヨハネによる福音書」(2:1-11, 6:15-21, 11:38-44)。

位一体の位格としてのイエス・キリスト像は崩壊し、「超越性の次元にある単一な神」と「生存者としてのイエス」と「歴史化されたキリスト」に分離しているのである。

2. 生存者としてのイエス像

パステルナークのキリスト論は、ミウォシュの語ったように、「非神学的」である。パステルナークの作品に表現される思想は、彼の持つ知的体系を考慮すれば、「世界観」という単純な用語に帰結させるわけにはいかない。ミウォシュの鋭い指摘通り、パステルナークの作品には典礼学のイメージが溢れているが、そこにおける宗教テーマ、とりわけ『ドクトル・ジヴァゴ』におけるキリスト教モチーフは、教条に殆ど関係ないようだ。パステルナークが書いたのは、彼の経験のみである。それはパステルナークの経験した「生に近いもの」と考えるしかあるまい。しかも、パステルナークは生と真実とに緊密に連結していた人間である。²⁸ 従って、「ユーリ・ジヴァゴの詩」におけるキリスト像は現実世界における詩人の生活としっかりと結びついて、生存者となり、生きている人間であり、生存するキリストである。人間としてのイエスは自然に人間の感情と感受性を有し、人間的な思索をし、人間にあるべき苦痛を感じている。詩「ハムレット」における叙情的主人公のように生を送る(прожить жизнь)とき、イエスには生の情熱が溢れている。受難(Страсть)はイエス・キリストの主要な仕事だが、スラヴ語派の形態論及び語源学の視座から見れば、情熱(страсть)と等しいものである。これに関して、トゥンツェヴァは次のように述べている。「スラヴ語系にある情熱(Страсть)という単語は、あなたの知っている通り、まず受難(страдание)、我が主の磔刑(страсти Господи)、『自発的な受難に降臨する我が主』(грядый Господь к вольной страсти)を意味する。それ以外、近代ロシア語においては、この言葉は淫乱や肉欲の意味でも用いられる。²⁹ 生存者としてのイエス像をより詳しく分析するため、「ユーリ・ジヴァゴの詩」における「イエスの受難・情熱(страсть)を把握し、パステルナークの真実に対する思索とともに考えなければならない。したがって、本章はイエス・キリストの「愛」と「予感」についての分析に向けられる。

2.1. イエスの「愛」と「受難」

イエスの「愛」は主に「マグダラのマリア I-II」の 2 篇で表されている。多数の評論家ないしパステルナーク本人は、マグダラのマリアとイエスのイメージの組合せをララとジヴァゴと平行的な存在と見做している。ララとジヴァゴを繋いでいるのは、愛と情熱を超えた次元にある、ララの語った「生の謎、死の難題、天才の魅力、開示(обнажение)の神秘」³⁰ に帰結しよう。人生の窮地で戦う人間の苦痛に対する悟り、人間としての生を生きる経験、超越への渇きは男女 2 人が共に深く知っている。ジヴェンスが書いているような情愛と聖

²⁸ Czesław Miłosz, *On Pasternak Soberly*. *Books Abroad*, vol. 44, no. 2, 1970, p. 205.

²⁹ Пастернак. Т. 4. С. 410.

³⁰ Пастернак. Т. 4. С. 498. 原文の обнажение を「開示」と訳したが、元々は「裸を見せる」という性的な意味合いが含まれている。マグダラのマリアをキリストに露呈するという告白の行為も、このような性的な意味が含まれると考えられる。

愛の統合とは異なり、パステルナークが表現するのはそれ以上に豊かな人間象だろう。³¹ 従って、ただ「愛」という概念のみならず、経験と超越という点にも注意を向けながら、「マグダラのマリア I・II」を分析していこう。

「マグダラのマリア II」に描かれているのは、マグダラのマリアがイエスの脚を洗うシーンである。「この騒ぎから離れ／小桶の香油であなたの／聖なる潔らかな足を洗い浄める」というシーンが詩の冒頭部に展開されている。³² 詩の前半ではマグダラのマリアの乱れ髪がイエスの脚を包み込むというエロティックな雰囲気感を漂わせながらプロットが進んでいる。このような雰囲気は確かにリルケの詩「ピエタ」(1907)を想起させる——「私の髪にあなたの両足はどんなに狼狽えたのでしょうか／あたかも棘の灌木林に捉まった白い野獣のように」。³³ だがパステルナークの詩に立ち返ると、それは「髪に毛に埋める、頭巾(бурнус)に埋めるように」と変更されている。³⁴ メタファーが変えられたが、その雰囲気は似ている。薄暗がり(り)の部屋で、男女 2 人が肉体的に接近しているエロティックな描写で、イエスとマグダラのマリアの間のより緊密なつながりを表現している。別の弟子たちのキリストに対する呼称と違って、マグダラのマリアは彼のことを単に「イエス」と呼ぶ。こういう呼称も、2 人の間に緊密な繋がりがある証明だろう。「マグダラのマリア I」では、マグダラのマリアが自分の肉体をアラバスターの油瓶と見做し、生涯のおわりにそれを「あなたの面前で打ち砕き」、受難の開始を迎えるため、自分の罪をキリストの面前で告白し浄化されている。その告白という行為は、マリアをキリストに露呈する(обнажение)ことを意味する。上記のような意味を踏まえ、彼女はもう「限界に達する」、従って「あなたの面前で(自分の肉体を)打ち砕く」。それこそが彼女の「復活」に対する唯一の道である。一連全文を読むと、マグダラのマリアが自分の身体とキリストの肉体を一体化させていることが明白になる。

Осталась несколько минут,
И тишь наступит гробовая.
Но раньше чем они пройдут,
Я жизнь свою, дойдя до края,
Как алавастровый сосуд,
Перед Тобою разбиваю.

³¹ ソロヴィエフの理論において、エロス(情愛)とアガペー(聖愛)は緊密に関連している。ジヴェンスはジヴァゴの 3 人の女に対する愛を簡単に「エロスを通じて表現した聖愛」と概括している(Givens, *The image of Christ in Russian literature*, p. 99.)。しかしながら、ララとの関係は別の 2 人の女の場合とは違っており、簡単にエロスとアガペーの概念統合でまとめるわけにはいかないようなものである。2 人の間にあるものは、人間というものの理解と生に対する同じ信念である。

³² *Пастернак*: T. 4. C. 545.

³³ Rainer Maria Rilke, *Neue Gedichte*, Leipzig: Iminsel-Verlag, 1907. S. 21. 原文は次の通り。“wie standen sie verwirrt in meinen Haaren / und wie ein weißes Wild im Domenbusch.” 「ピエタ」からの翻訳にあたって、次の既訳を参考にした。ライナー・マリア・リルケ／富岡近雄編『新訳リルケ詩集』都文堂、2003 年。

³⁴ *Пастернак*: T. 4. C. 546.

残された時間はほんのわずか
柩の静謐がまもなく訪れるだろう
しかしその数分が通過する前に
私の生を、限界に達しながら
アラバスターの油瓶のように
あなたの前で打ち砕く³⁵

「残された時分はほんの僅か」が示唆しているのは、キリスト受難の来臨である。「葬る静謐も来る途中」にあたって、マグダラのマリアは肉体的な清潔を得るために、自分を開いて告白するべきと考える。この詩は、小説本篇におけるララとジヴァゴの関係を示唆しているだろう。ララはコマロフスキーに汚れされた秘密をジヴァゴに告白し、裸の自己を示した。そしてジヴァゴの追悼会において、彼女はジヴァゴの棺の傍で「佇んで数分のあいだ沈黙していた、考えも泣くこともなくて、棺の中心に覆っている花とその下のからだを抱き締めるのだ。頭で、胸で、魂で、そして魂と等しい広さの両手で」。³⁶ 2人のイメージは肉体も魂もともに混じり込み、同化している。それは主と信徒の愛、つまり宗教的な愛ではなく、2人の「人間」の愛である。マグダラのマリアが持っているイエスに対する愛は、続く一連に表現されている。

О, где бы я теперь была,
Учитель мой и мой Спаситель.
Когда б ночами у стола
Меня бы вечность не ждала,
Как новый, в сети ремесла
Мной завлеченный посетитель.

おお 今私はどこにいけばいいのか
我が師かつ我が救世主よ
もし夜ごとテーブルの傍に
永遠が待っていてくれなかったら
あたかも私の生業の網に捕らえられた

³⁵ Пастернак. Т. 4. С. 545.

³⁶ Пастернак. Т. 4. С. 497.

新しい顧客のように³⁷

マグダラのマリアが望んでいるものは、ヨハネの黙示録に予言しているキリスト再臨による神の国ではなく、永遠に続く生命でもない。彼女が求めているのはイエスとの間に横断している時間と空間を超克する愛であり、彼女の救世主としてのイエスがその前に提示した罪から解放させられる自由でもある。強い意志を持ちつつ、彼女はイエスと同様に、自分の「受難」に向かって歩きだした。

マグダラのマリアとイエスは、ラリーサとユーリのように、生に対する情熱で結びついている。後者は「子守り唄」という詩の連作に見出される。「風」、「ホップ」、「お伽噺」の3篇が、この連作に含まれている。³⁸ これら3篇の詩では「僕は死んでいた、けれども君は生きている」や「僕たちの肩にコートが覆っている／君を抱きしめているのは我が両手」といった描写だけでなく、カップルの男女の間に関わっている愛情と優しさがきめ細かく表されている。そして2人の「人間」の相互交流と生に対する希望を示す。「お伽噺」では、パステルナークが聖ゲオルギーの伝説を用い、勇敢なる戦士と救われた公女の人物像を描いている。

Но сердца их бьются.

То она, то он

Сиятся очнуться

И впадают в сон.

しかし二人の心臓が鼓動している

時には彼女、時には彼が

目を覚まそうと力を含め

また夢に落ち込んでいく³⁹

2人のイメージが同一の運命に落ち込み、「冬の夜」に書かれているのと等しく、「天使のように、両翼が／十字架のように重なった」とも言える。⁴⁰ このような視点から見れば、幻想的な「お伽噺」というより、この詩は2人の「人間のイメージ」を描き出している。歴史、芸術、そして生活の中にあり、生と死の境目に人間の神秘を探求している男女が舞台上上がったのだ。

しかしながら、情熱の愛(страсть)は、受難(Страсти)と緊密に関連している。「マグダラのマリア」の1とII篇は、概ねイエスの磔を主たる場面として描きながら、各々の問題を提示している。第1篇において、マグダ

³⁷ Пастернак. Т. 4. С. 545.

³⁸ Пастернак. Т. 4. С. 729.

³⁹ Пастернак. Т. 4. С. 531.

⁴⁰ Пастернак. Т. 4. С. 533.

ラのマリアは地獄について尋ねている。第 2 篇において、マグダラのマリアはイエスの磔を見届け、その受難について直接に答えを乞う。生と死の意味を解明した以上、愛していた人の受難を経て、マグダラのマリアはこう言うのである、「この恐ろしい中間期を過ごす間に／私は復活に届くまで成長するでしょう」と。⁴¹ ここで連想しやすいのは、リルケの詩における「おお、イエス、イエスよ 私たちの時はいつだったのか」⁴² という問いであろう。リルケのマリアは「私たち二人はなんと不思議に滅びへの道を歩くでしょう」⁴³ と深く嘆いたが、パステルナークのイエスはただ「滅びへの道を歩く」のであり、現在の生活を見据えることをしない。パステルナークのイエスとマリアは未来としての復活を眺めている。彼らにとって、情熱と受難の謎は、生と死の謎である。

「マグダラのマリア I」では、イエスの磔による積極的な意義が強調されている。マリアはどうとう、イエス・キリストと一体になった。彼女にとって、肉体は靈魂と等しく重要だ——「私は、たぶん、抱きしめることを学びにくい／その十字架の四角柱を／そして、感受を拭き取り、身体へ馳せながら／あなたの葬儀を用意する」。⁴⁴ 人は死から避けられない。けれどもその後の復活は期待できる。「マグダラのマリア II」における人間像は「中間期」、すなわち受難から復活までの 3 日間によって確認されて、しかも深化されている。

Но пройдут такие трое суток
И столкнут в такую простоту,
Что за этот страшный промежуток
Я до Воскресенья dorасту.

しかしそのような三昼夜が過ぎ去り
そしてあまりの空虚に突き落すでしょう
この恐ろしい中間期を過ごす間に
私は復活に届くまで成長するでしょう⁴⁵

この「恐ろしい中間期」の間、死から生への転身で、イエス・キリストは地獄に臨んで死に対する勝利を宣告したが、もう一人の人間マグダラのマリアも生と死の謎を解いて、「復活」に至った。超越性を認識できるのが神人ただ一人であった聖書の描写やプロットとは全く異なり、ここでは超越性を認識できる 2 人の人間が描き出されている。

⁴¹ Пастернак. Т. 4. С. 544-546.

⁴² Rilke, Neue Gedichte, S. 21. 原文は次の通り。"O Jesus, Jesus, wann war unsre Stunde?"

⁴³ Rilke, Neue Gedichte, S. 21. 原文は次の通り。"Wie gehn wir beide wunderlich zugrund.,,

⁴⁴ Пастернак. Т. 4. С. 545.

⁴⁵ Пастернак. Т. 4. С. 546.

2. 2. イエスの「予感」

連作中に表現されているイエス・キリストは、激しい情熱以外に、自己犠牲の予感に苦痛と憂鬱を経験している。彼は自分の人間的実存を感知しながら不安を感じている。連作全体では 3 箇所がこの実存に対する不安を明らかに表している。それは「ハムレット」と「ゲッセマネの園」に表現されている聖杯の祈りの箇所と、「奇跡」の冒頭部の一連である。

Он шел из Вифании в Ерусалим,
Заранее грустью предчувствий томим.

彼はベタニアからエルサレムに行った
あらかじめ予感の哀愁に苦しめられている⁴⁶

前述したとおり、「ハムレット」と「ゲッセマネの園」に登場したイエス・キリストは敢えて自分の意思で運命の籤を取ったわけではない。むしろ、父神の意思に従い、与えられた運命を受けるだけだ。その運命は避けられない。しかしながら彼は、一度はその定められた人生を拒もうとし、「もし可能であれば」と神に乞う。彼は自己の意思を強く持ち、行動と知覚を統一して、運命に逆らおうとする。とはいえ、彼はこの先に死が待っていることを承知している。

個人の実存を感知しつつ主体の感情と行動を強めて表現するのは、ハイデッガーの時間的存在論、特に *Sorge* という概念、即ち「人間実存の本質」を連想させる。⁴⁷ ハイデッガーの「死に向かう存在」は、パステルナークのイエス像に近い。この 2 人は類似した信念を持ちつつ人間の本质を考察していた。その信念は、「死は避けられないが、生の謎を究明する鍵だ」というものだろう。しかし 2 人の考察の間には、微妙な差異がある。それは死後の出来事と死に直面しての情態性 (*Befindlichkeit*) である。ハイデッガー的な人間は死後、消滅していくが、パステルナークのイエスは復活する。ハイデッガーは死に対する人間の畏怖 (*Angst*) を提唱しているが、そのような畏怖はパステルナークのイエスには認められないだろう。虚構の詩人ジヴァゴの経歴に目を向けるなら、彼が養母の葬儀に現れた際に見せた勇敢さは注目に値する。「今彼は何もかも怖くない。

⁴⁶ *Пастернак*. Т. 4. С. 541.

⁴⁷ *Sorge* は「気づかい」と訳すればよからう。*Sorge* はハイデッガーの『存在と時間』における重要な概念の一つである。ハイデッガーの理論を簡単に説明すれば、現出存在の過程は 3 つの段階に分けられる。人間は孤独であり、死に向かって生きる、即ち「被投性」(*Geworfenheit*)。人間はそれを感じる、「(畏怖も含む)情態性」(*Befindlichkeit*)。そしてその人間の個体がそれについて思索し、何か行動をとる、「理解」(*Verständnis*)と「解釈」(*Auslegung*)。「気づかい」はこの過程の中核である。我々人間は絶えず本性的に関心を持っている。しかしながら、ハイデッガーは敢えて道徳的な主体としての人間を考えなかった。彼は超越性を前にした人間の敬虔を無視し、存在論的な存在に専念した。ハイデッガーとパステルナークを分かつのはこの点においてである。Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, Tübingen: Max Niemeyer Verlag, 1967, S. 144-153, 175-196.

生も死も」。⁴⁸ パステルナークは人の行動における「道徳的な」(нравственный)側面や「責任感」(добросовестность)を強調している。⁴⁹ 定められた運命やその超越性の前に、イエスは祈り、そして敬虔に請願したのである。ハイデッガーの理論は、イエスの存在の出発点にも目的地にも関わらない。イエスは生存者として生と死を隔てる幕を徐々に開き、超越性の知識を受入れ、そして自分自身の実存と繋がっている。それは決して「被投性」(Geworfenheit)ではない。人は死に向かって生きるが、死後は復活(肉体的な蘇生ではないが)、他者の記憶に霊として(душа на других)生き続ける。

2.3. イエスという人間像

「私のキリスト教はその広がりにおいて、クエーカーやトルストイのものとは違って、福音書の別の側面からもっと道徳的な方向に展開していくものだ」と、フライデンバルク宛の手紙に記されている。⁵⁰ 1940年代以降のパステルナークは、道徳的な主体を強調している。連詩におけるイエス・キリストはまさにその代表的なものであって、この人物は時代の責任を担い、自らに与えられた使命を果たした。そのキリスト像はただの生存者で、自分の使命を知り、死に向かって生き、そして生と死そのものを超克するものだ。彼は渇き、餓え、そして人を愛し、生存を感知する。彼は超越性の存在を信じており、自分の使命を知りつつ他者に対する責任をとる。彼はあくまでも自分の感受性(впечатлительность)で知覚した超越性の前に敬虔に頭を垂れる。彼は、生身の、生きていた人間だ。

そして彼の使命は、受難(Страсти-страдания)だ。「ゲッセマネの園」においては、キリストが自発的に自己犠牲を行う描写が見付けられる。最初に、彼は死が不可避であることを承認し、自分の人間性を宣告している。

Он отказался без противоборства,
Как от вещей, полученных взаймы,
От всемогущества и чудотворства,
И был теперь как смертные, как мы.

彼は抗うことなく拒絶した
貸し与えられたものを返すように

⁴⁸ *Пастернак*. Т. 4. С. 88.

⁴⁹ テキストからはっきりと読み取れるように、パステルナークは意図的に『ドクトル・ジヴァゴ』における道徳的な思考や「同時代的な責任感」(современная добросовестность)を強調している(エッセイ「シヨパン」(1945)を参照。*Пастернак*. Т. 5. С. 62.)。パステルナークの意図に関して、彼の書簡集においてその直接的な証拠を見出すことができる。具体的には1946年10月13日オーリガ・フライデンバルク宛の手紙を参照されたい。*Пастернак*. Т. 9. С. 472-473.

⁵⁰ 注48を参照されたい。

全能と奇跡の力を拒絶した

そして今、我らと同じ、死すべきものになった⁵¹

イエスは自分の人間としての本質を確認し、死の不可避性を強調しつつ、役割を果たす決心をより強めた。その決心こそが様々な民族と神々の世界を終結し、「人間」の歴史を創るのだ。このような観点から見ると、イエス・キリストは明らかに、以前も祈りの当ても、聖書に書かれていることが自分において成就するのを知っているとすることができよう。

Он разбудил их: «Вас Господь сподобил

Жить в дни мои, вы ж разлеглись, как пласт.

Час Сына Человеческого пробил.

Он в руки грешников себя предаст».

彼は弟子たちを起こした 「我が主があなたたちに

わたしの日時に生きる事を恩賜した 手脚を伸ばして臥せるが良い

人の子の時計が打った

彼は悪人の手に自分を渡すだろう⁵²

『マタイによる福音書』のテキストでは、「そして人の子は書かれているとおりに去っていく。だがあの者は、人の子を裏切って渡した者は、生まれてこなかった方がよかっただろう」と書かれている。⁵³ しかしこの引用の4行には、全く別の立場が読みとれる。イエスは「自分を渡すだろう」(себя предаст)と言っているのであって、「渡される」(предается)と言っているのではない。「彼は悪人の手に自分を渡すだろう」という表現は、イエス自身の意志が明確に示されており、そしてその能動性も強調されているのである。

一方、福音書ではその「渡される」という動作の受動性だけが強調されているのである。自らの弟子たちが「人間の歴史」に生きるように、イエスは自分自身を渡した。しかしながら彼は苦しんでいる。彼は弟子たちに理解されなかった。弟子たちは眠りの淵に落ち込んでいる。そのため、皮肉にも「恩賜する」(сподобить)という言葉が使われているのだ。

概して、パステルナークの宗教観はいかなる神学流派や哲学的な定義とも異なっている。連詩を通して表された彼の宗教観が、人間や人間のイメージの新たな可能性を示唆するものであるからだ。

⁵¹ Пастернак. Т. 4. С. 547.

⁵² Пастернак. Т. 4. С. 548.

⁵³ 「マタイによる福音書」(26:24)。原文は次の通り。「впрочем Сын Человеческий идет, как писано о Нем, но тому человеку, которым Сын Человеческий предается: лучше было бы этому человеку не родиться.»

3. 歴史化されたキリスト像

「キリスト」という言葉が持つ二つの意味に関して、プーバーとドイツの宗教学者のフルッサーは次のような定義をしている。後年の著作である『キリスト教との対話』(Zwei Glaubensweisen, 1950)において、プーバーはヘブライ的(emuna)とギリシヤ的(πίστις)という二つのカテゴリーに整理している。一方、フルッサーは「キリスト教に内在する調和不可能の二重信仰」としての「キリストの信仰」と「キリストに対する信仰」という風に整理している。⁵⁴

プーバーやフルッサーの定義を参照すると、キリスト教に内在している二重性も簡単に「ヘブライ的-旧約的(ただし、福音書に描かれている)-キリストの」信仰と「ギリシヤ的-新約的(使徒パウロの)-キリストに対する」信仰の二重信仰で理解しうらうだろう。

3.1. 語り手の変化と歴史化の過程

「1. 三位一体のイエス・キリスト像」の冒頭部で述べたように、「ユーリ・ジヴァゴの詩」のイエス・キリスト像は直接的な描写と間接的な描写の2種類に分かれている。この区分の眼目は叙述の語り手である。第一に、直接的な描写において、生きているイエス⁵⁵は自分の生涯を語り、生の感情を表現する。この類型に属するのは、連詩の第18篇の「降誕祭の星」、第20篇の「奇跡」と第22篇から第25篇の「禍々しい日々」「マグダラのマリア I-II」「ゲッセマネの園」である。第二に、間接的な描写において、語り手はイエス以外であり、それは3種類に分類できる。まず、イエスと同時代の傍観者である。彼らが語っているのは、他者の記憶や記録の中のイエス・キリストと彼が為した奇跡であり、「禍々しい日々」の第5から第9連目において、それらは集中的に表されている。次に、後世のキリスト教徒である。彼らについての叙述を通して表されているのは、宗生活に溢れているキリストへの記念である。それは、連詩の第3篇「受難週」が典礼学の内容と呼称し、これを反映していることから明らかである。そして最後に、信仰心を持っている芸術家である。そこで語られているのは芸術家としてのキリストのイメージであり、それは連詩の第14篇「八月」に表されてい

⁵⁴ Emuna はヘブライ語の「信仰」であり、πίστις はギリシヤ語の「信仰」である。プーバーは、この2つの語が「旧約的信仰と新約的信仰を象徴しているとして、ユダヤ的・キリスト教的な2種類の信仰を区別した。のちに、再刊された『キリスト教との対話』の「あとがき」において、フルッサーは、そのようなプーバーの思想を批判している。彼によれば、この2種類の信仰はキリスト教と「キリスト」像に内在する二重信仰であり、プーバーのように分類するのではなく、「キリストの信仰」(イエスが持っている信仰(Glauben des Jesus / Glauben Jesu))と「キリストに対する信仰」(教徒が持っている信仰(Glauben an Jesus / Christus))で区別すべきであるという(Flusser, Bubers Zwei Glaubensweisen, S. 210.)。また、フルッサーは、emuna と πίστις の2分類は、対立的な両極(Polarität)である「律法による行為」と「キリストに対する救済の信仰」に基づいていると述べている(ebd., S. 207-208.)。彼は「キリストの信仰」と「キリストに対する信仰」の歴史的差異を解明するために、「歴史上のイエスはいつも神に対する信仰を言っていた。彼は、人に自分のことを信仰するのを要求してはなかった」という事実を強調する(ebd., S. 209-210.)。フルッサーによると、「キリストの信仰」から「キリストに対する信仰」の転換はイエスの磔刑の後で発生した。それと同時に、「キリストの信仰」は福音書のみに見えると強調されている(ebd., S. 210.)。詳しくは、次の文献を参照されたい。David Flusser, Bubers Zwei Glaubensweisen, Martin Buber, Zwei Glaubensweisen, Gerlingen: Schneider, 1994.

⁵⁵ 「降誕祭の星」はイエスの誕生を語っているため、より客観的な直接的描写である。

る。

語り手の転換は同時に、イエスという生存者の人間像が歴史化されていく過程を示している。一人称的な経験や感情は、三人称的な記憶へと変貌を遂げる。そして文字として記載され、聖書というキリスト教徒の生活の指導教本となり、歴史の基礎と後世の人々に受け継がれていく。このような過程こそが、「歴史化」である。歴史叙述について、パステルナークには以下のような記述がある。

[……]文化は実りのある存在である。この定義で十分だ。人々を数世紀で実り豊かに改変させて、町、国家、神々、芸術作品を大自然の実りのように、枝に懸かる果実のように自ずと成熟させる。人間はもつと遠くに行ける。歴史叙述(Geschichteschreibung)とは何か。それは収穫のリスト(Emte-Inventur)であり、結果の順列表(Folgenverzeichnis)でもあり、生の出来事の記録(Eintragung der Lebensereignisse)でもある。⁵⁶

パステルナークにとって、歴史叙述は収穫のリストや結果の順列表で、時間の流れに沿って書かれているものだ。何よりもまず、その叙述は「生の出来事の記録」である。『ドクトル・ジヴァゴ』においてジヴァゴの叔父のヴェージェニャピンが語っている「歴史」を参照すれば、「ユーリ・ジヴァゴの詩」におけるイエスの生涯とキリストという歴史化されたシンボルとの差異が明確になるだろう。

キリストを信じるべきだと、私は言いましたが、今からその点を説明しますよ。あなたは理解していないのですよね、無神論者であることは、つまり、神の有無や神の存在意味を知らず同時に、人間は自然の中に生きているのではなくて、歴史の中にこそ生きているということを承知することは可能であることを。そして、現在の理念からすれば、この歴史はキリストによって創立されたものであり、福音書がその基礎であるということです。そういえば、歴史とは何か。それは、人間が死の謎に挑み、未来においてそれを超克しようと努めてきた何世紀にも亘る事業の樹立である。⁵⁷

ヴェージェニャピンの考えによれば、歴史の基礎はキリストだが、その証拠は福音書である。キリストの歴史化とは、イエスの生涯をイエス自身が感じ、生きるのではなく、その外部からイエスの生涯を他者が記憶し記録できるようになること、イエスの生涯の語り手の転換を意味することなのである。「ユーリ・ジヴァゴの詩」におけるイエス自身からの語りについては第2章で既に述べたので、ここからは後者、すなわち「キリストの歴史化」における3つの類型を詳しく展開する。まずは「禍々しい日々」の第5から第9連目の「他者の記憶」から始めよう。

⁵⁶ Пастернак. Т. 5. С. 280.

⁵⁷ Пастернак. Т. 4. С. 12-13.

「禍々しい日々」に描かれているのはイエスの受難シーンである。磔の刑場外は既に「人の群れ」が集まっている。ファリサイ人がイエスを呪詛し、罪状を数えている時に、刑場の周りに密集している人々の間では、瞬く間に噂が広がっていく。

И полз шепоток по соседству,
И слухи со многих сторон.

隣の群れに囁きが這っていく
そして四方から噂が聞こえる⁵⁸

この「噂」の内容に含まれているのは、救世主として存在しているイエス・キリストと彼が行った奇跡だ。カナでの婚礼、海水の上を歩く、そしてラザロの復活という 3 つの奇跡と、キリストが「受肉」した神として荒野の試練で悪魔の魅惑を拒否すること、それに賢者の予言でエジプトへの亡命という 5 つの出来事である。この 5 つの出来事は全部民衆の間に広がっている噂や囁きの内容であり、イエスの生涯にわたる経験ではない。しかしながら、その 5 つの出来事はすべて福音書に記載されている文書である。言い換えれば、それは三人称の語り手で語られ、記録となった伝記である。「禍々しい日々」においては、事実上、三人称である他者の記録が最初から現れて、人間としてのイエスと民衆たちに認められるキリストのあいだに微妙な緊張感が亘っている。

Когда на последней неделе
Входил Он в Иерусалим,
Осанны навстречу гремели,
Бежали с ветвями за Ним.

最後の一週間に至った時
彼はエルサレムに入った
ホザンナの歓声は雷で出迎え
彼の後ろに柳の枝を持ちつつ追隨する⁵⁹

第 1 連では、イエスがエルサレム城に入ったばかりのときのことを書いてある。「ホザンナ」という歓声と柳

⁵⁸ Пастернак. Т. 4. С. 543-544.

⁵⁹ Пастернак. Т. 4. С. 543.

の枝の祝祭は既に民衆たちの承認を表明している。しかしながら、次の描写ではイエスの感覚が提示されている。

А дни все грозней и суровой,
Любовью не тронуть сердец.

しかし日々はますます険しく厳しくなるだろう
愛で心に触れることももうできない⁶⁰

イエスは 5 日後、自己を犠牲にしなければならない。生きるべきか死すべきかの問題に直面しているイエスは、ホザンナの歓声にも、何の喜びも覚えない。彼の先に展開する道は、死に直結している。エルサレムに入るといふ出来事は、イエスと民衆たちにとって、それぞれ異なる意味を持つ。イエスにとっては、それは間違いなく死への道だ。人間の肉体としてのイエスの体は刑を受け、生のない肉の塊になるだろう。一方、民衆たちにとって、それは救世主の顕現であり、彼らの救済である。第三者としての群衆や観客は当然、イエスの経験や知覚を知らないままに、自分自身の理解によって歴史を記録する。このように、語り手の転換はただの人称の変化ではない。それは対象の歴史化を伴うのである。本稿の第 3 章の冒頭において、ブーバーの「二重信仰」における「キリスト教に対する信仰」に言及したが、それはこの三人者の記録から見出せるだろう。キリストを信じる民衆たちは、そのような「キリストに対する信仰」を持ちつつ、ベタニアからエルサレムに入ったイエスを救世主と扱うのだ。しかしイエスと同時代のキリスト信仰は、連詩の内容においては少ない。連詩の第 3 篇「受難週に」では、後世のキリスト教徒の宗教生活に欠かせない典礼学の内容を通じて、「キリストに対する信仰」が色濃く表されている。

3. 2. 歴史化の結果: 典礼学の中核となったキリスト

「受難週に」では、キリスト教の四旬節(Святая Четыредесятница)における最後の一週間、すなわち受難週(Страстная неделя, седмица)の祝儀をめぐって、典礼学を踏まえつつ、キリスト教徒の宗教生活を描き出している。その中心にあるのは、キリストの受難に関わる一連の出来事への記念と復活祭までの準備である。キリストというイメージは既にその生存者としてのイエスであり、生きている人間ではない。それは真なる神に至った者であり、キリスト教徒の信仰対象である。「受難週に」の詩篇を通して、完全に歴史化されてシンボルとなったキリスト像を読むことができる。ソ連期の典礼学者・神学者のシマンスキーの『典礼学: 神学校用学習参考書』(Липургика: Учебное пособие для Духовных Семинарий, 1950-e)を採用し、「受難週に」のテク

⁶⁰ Пастернак. Т. 4. С. 543.

ストを精読して、そこにある歴史化されたキリスト像を究明しよう。

3. 2. 1. 受難週の典礼学

「受難週に」のテキストを通覧すると、すぐに「聖大水曜日から聖土曜日まで」や「復活祭の力で」という時間が強調されている詩行が見つけられるが、いかなる連が、そしていかなる行が、いずれの曜日に対応するのか、というのは一目でわからないようだ。シマンスキーの『典礼学：神学校用学習参考書』を参照すれば、復活祭までの一週間は受難週で、最も重要なのは聖大水曜日からの3日間だということがわかる。後掲の【図1】に、簡潔に各曜日の記念内容と祝儀詳細を挙げる。⁶¹

受難週の初めの3日間は、キリストの受刑の準備を記念する。1日目の大月曜日は、旧約聖書に記載されているキリストに対するユダの裏切りと受難を示唆する予言を記念すると同時に、福音書に書かれている無花果の木に対する呪詛も記念する。聖大火曜日では、キリストのファリサイ人とローマの書記官たちへの告白と説教を祝祭する。聖大水曜日においては、ハンセン病のシモンの家での晩餐と、涙と高価な油でキリストの足を洗う罪のある女を記念する。この3日間では、ほぼすべての詩篇(Псалтирь)を唱えることになっている。

受難週の大木曜日は4つの出来事を記念する。①最後の晩餐と、その途中に教導する聖体秘儀(Евхаристия)。⁶² ②キリストの門徒が師に対する敬虔と愛を表すために、地に額づいて彼の足に口付けすること。③キリストのゲッセマネでの祈禱。④ユダの裏切り。詩篇、予言書、福音書の音読以外は、晩禱にあたる時、聖ヴァシーリーの大祝祭(Литургия святого Василия Великого)、すなわち聖体祭が行われる。この祝祭は、一般的に「キリストの受難」(Страсти Христовые)と呼ばれている。⁶³

受難週の大金曜日はキリストの判決、磔刑と死を記念する。午後4時頃、キリストの遺体の納棺と埋葬を予告する晩禱の開始とともに、旧約三書の抜粋(Паремия)と使徒伝記の朗読が始まる。その後はマタイ、ルカとヨハネ福音書におけるキリスト受難の部分が読み始められる。そして聖像布(плащаница)⁶⁴を中心とする儀式が始まる。聖職者は祝祭の宝座(престол)と聖像布の周りに立ち、礼拝者たちと共に祈禱文を唱える。その祈禱文の合唱のなか、聖職者が聖像布を棺に納棺し、至聖所(алтарь)から北門⁶⁵を經由して持ち出し、特定の卓や棺に安置する。

聖土曜日はキリストの納棺と葬式を記念する。そして、キリストの魂が体から飛び出して地獄まで至り、死に対する勝利を宣告すること、そして彼の帰還と天国への進入を信仰することによる魂の救済を、それぞ

⁶¹ 【図1】に挙げる典礼学の内容は、すべてシマンスキーの『典礼学：神学校用学習参考書』(Литургия: Учебное пособие для Духовных Семинарий)を参照する。受難週に関する内容は第2部の第2章「受難週」から抜粋。原文は以下のサイトを参照。[https://azbyka.ru/otechnik/Germogen_Shimanskiy/liturgika/18_1] 2021年5月22日閲覧。

⁶² すなわち、キリストの体がパンとなり、血がワインとなるということ。普通の聖体拝領式(причащение)と区別される。

⁶³ 次も参照されたい。Пастернак. Т. 4. С. 739.

⁶⁴ キリストの眠りの聖像を描いた布で、キリストの聖遺骸を象徴する。

⁶⁵ ある場合は皇門(царские врата)、聖障(иконостас)の中央に位置する門。北門はその右。

れ記念する。この日の祝儀は復活祭の準備を中心とする。早朝から翌日の復活祭まで、祝儀と詩篇の合唱は続く。朝の礼拝で、6 篇の詩篇が唱えられた後、聖職者は至聖所から皇門を開けて、聖像布の置き場まで歩く。そして主任司祭は聖像布へ、至聖所へ、また聖堂に集めている礼拝者に香を焚き、祝福する。長い合唱と祈祷の後、聖職者と礼拝者は蝋燭を灯し、復活の光明を象徴する。そして、合唱の儀が終わった後、聖職者は聖像布に礼をし、聖像布を敬虔に持ち上げながら、福音書を挟み、教衆の行列を率い、聖堂から出て庭の縁に沿って進行する。それは、キリストの埋葬を記念する儀式である。その後、聖像布が聖堂に返され、聖体拝領式が行われる。この日の夜に、「そしてすべての人の肉は沈黙す」(Да молчит всякая плоть человека) という祈祷文を読む。

聖大土曜日の意義は単なる復活祭の前夜ではない。典礼学では「安息すること」(субботствовать)がある。救世主キリストは自己犠牲を通じて世界の救済を完成し、この日にこそ埋葬され、教徒に永遠の静謐をもたらす。この日は、キリストの魂が地獄に至って死に対する超克を宣告する日でもある。

さて、受難週における典礼学的な内容を巡った今、「受難週に」というパステルナークのテキストに戻ろう。第 3 連では、「聖大水曜日から聖大土曜日まで」の表現で初めて儀式の内容が明らかになる。1 日目から 3 日目の儀式内容は曖昧模糊で明確に指摘できないようだが、4 日目から 6 日目の儀式は極めて目立っている。

第 5 連の「キリストの受難こ」(На Страстях Христовых)は、聖大木曜日の聖ヴェシーリーの大祝祭という儀式を明確に提示する。⁶⁶ 第 6 連の「大地の秩序は揺らめく／彼らは神を埋葬する」は、聖大金曜日に行われる聖像布の安置の儀を意味する。そして第 7 連と第 8 連は、聖大土曜日の祝儀を書いている。

И видят свет у царских врат,
И черный плаг, и свечек ряд,
Заплаканные лица --
И вдруг навстречу крестный ход
Выходит с плащаницей,
И две березы у ворот
Должны посторониться.

И шествие обходит двор
По краю тротуара,
И вносит с улицы в притвор

⁶⁶ 注 57 を参照されたい。

Весну, весенний разговор
И воздух с привкусом просфор
И вешнего угара.

皇門の傍には光が見える
黒いソハンカチ、蠟燭の行列
涙に濡れた顔
突然、十字架行列が聖像布を持って
外に向かって歩み出てくる
正門前に立っている白樺は
道を譲るべきだ

葬列は庭の縁に沿って
一周を回って進行する
街中から教会の玄関に春を
持ち込む、それに春の談話と
聖パンの香りを伴った空気をも
春めいた沈酔をも⁶⁷

春に蘇る大自然を描きながら、パステルナークは聖大土曜日の祝儀を中心に、典礼学的な内容を書き出している。皇門を対面して祈祷する教衆は、葬儀の衣装を着て、蠟燭を点して、皇門から出てくる聖職者たちを待っている。そして、聖職者が聖像布を持ち運ぶと同時に、礼拝者と聖職者の構成されるキリストの葬列は、聖堂の正門から外の庭へ歩き出す。儀式の流れと伴って、復活を予言する春の匂いと、準備した聖体拝領式の聖パンの香りが共に、庭に広がっている。第 11 連の「しかし夜中に獣と人は沈黙するだろう」も、聖大土曜日にあたる祈祷文、すなわち「そしてすべての人なる肉は沈黙す」から由来する。もっと直観的に「受難週に」のテキストに言及されている典礼学の内容を理解するため、次の【図 1】を参照されたい。

【図 1】

曜日	月・火・水	木	金	土
記念内容	言明なし	聖体秘儀	磔刑・死	埋葬・地獄に死への勝利宣告

⁶⁷ Пастернак. Т. 4. С. 517-518.

儀式内容	聖ヴァシーリー の大祝祭	至聖所から聖像布 を卓に安置	聖像布を前に行列で庭を回る 聖体拝領式・祈祷文
連:行目	5:23	6:34	7-8, 11:35-47, 58

典礼学の内容を踏まえると、キリストは教徒の信仰対象で、そこで反映しているのが「キリストに対する信仰」ということは十分分かるだろう。教徒の生活の一部としての典礼から現出していくキリストは、完全なる神として崇拝される。それこそが「歴史化」の結果である。

3. 2. 2. 受難週と関わるイエス像とキリスト像:神と人間の境目に

生きる者としてのイエスの形象は、第 2 章において、「マグダラのマリア」2 篇、「奇跡」、「ゲッセマネの園」などの詩に即してすでに分析した。ところで、これら 4 篇と「禍々しい日々」は、「受難週に」と同じく、受難週の出来事を描き出している。前者と後者を区分する鍵は、歴史化である。先行研究では「受難週に」はそれ以外の 5 篇とともに「受難週詩篇」と呼ばれているが、⁶⁸ 歴史化という観点を導入することによって、この「受難週詩篇」において「キリストの信仰」と「キリストに対する信仰」が峻別され、前者から後者への道筋が示されていることを、明らかにすることができる。

「奇跡」では、イエスがエルサレムに入る前に、無花果の木を呪詛することが書かれている。「禍々しい日々」では、イエスのエルサレム入場から、彼とファリサイ人の接触と彼の逮捕・審判・磔刑のシーンが描かれている。「マグダラのマリア I」においては、マグダラのマリアという人物像が、聖書に記載されている「罪のある女」の代わりに、「アラバスターの油瓶」を打ち砕き、涙でイエスの足を洗う。そして、彼女は「感情を取り払い、(イエスの死んだ)肉体に向かって」、イエスの葬儀を準備する。「マグダラのマリア II」では、マリアの涙でイエスの足を洗うということ以外に、イエスの磔刑と埋葬、ないし死に対する勝利宣言の発生する「中間期」(промежуток)までが言及されている。「ゲッセマネの園」で言及されているのは、イエスのゲッセマネの祈祷とともに、旧約に記載されている受難の予言である(「今こそその書かれたものが成就されよう/それを成就させよう。アーメン」⁶⁹)。

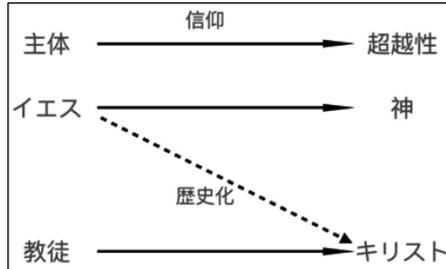
第 1 章と第 2 章の考察、そして第 3 章第 2 節第 1 項における典礼学の知見を踏まえると、「受難週に」とその他の「受難週詩篇」の差異は明らかだろう。「奇跡」などの詩は、生きているイエスを主体としており、自らの目を通じて世界を見、自らの体で世界を経験し、そして自らの立場から世界を思索しているイエスは、ただ自らの神を信じている。だが「受難週に」のテキストを読解してみると、主体がイエスから信徒へ、そして超

⁶⁸ Власов. Стихотворения Юрия Живаго. С. 163-194. または、Поливанов К.М. «Доктор Живаго» как исторический роман. Tartu.: University of Tartu press, 2015. С. 222.

⁶⁹ Пастернак. Т. 4. С. 548.

越性の位相にあるのが神からキリストへと変化していることが明らかになった。以上を図にまとめると、次のようになる。

【図2】



「受難週に」において、生きているイエスは一度も表れていない。表れているのは、イエス・キリストを象徴する聖像布だけだ。信仰という行為を表現するのは、聖堂に集められている聖職者と礼拝者、すなわちキリスト教徒たちだけである。主体は生きているイエスから教徒へと、超越性にある対象はイエスに対する一位格の神から三位一体のキリストへと、それぞれ変化する。イエスは「奇跡」などにおけるテキストの主体から、「受難週に」のテキストにおける信仰されている神へと変化している。まさに生きていたイエスが救世主キリストになるということ——これこそが「歴史化」の過程に他ならない。

このように「ユーリ・ジヴァゴの詩」における受難週に関する言及を整理すると、興味深い点が見つかる。「受難週に」やそれ以外のテキストについての【図3】を参照すると、聖大土曜日に関する描写の割合は「受難週に」で極めて多いと解るだろう。それではバステルナークにおいて聖大土曜日という日はどのような意味を有するものなのだろうか。

【図3】

	「受」での行数	「受」以外での行数	「受」以外の篇名
月	—	17	「奇跡」
火	—	6	「禍々しい日々」
水	—	12	「マグダラのマリア I・II」
木	1	14 ⁷⁰	「ゲッセマネの園」
金	1	10	「マグダラのマリア I・II」

⁷⁰ 「ハムレット」はいわゆる「受難週詩篇」ではないので、論述から除外されている。

土	14	12	「マグダラのマリア I・II」 「ゲッセマネの園」
---	----	----	------------------------------

前述の通り、聖大土曜日には「安息する」という意味がある。また、キリストの埋葬を記念する以外、この死すべきイエスが死んだ後、そして復活して不死のキリストとなる以前の中間期には、典礼学においては、イエス・キリストが地獄に降り、死に対する勝利宣言が記念されることについてはすでに述べた。「受難週に」のテクストにおいて、春に属する甦りの力と呼応するのは、死に対する勝利宣告である。

Но в полночь смолкнут тварь и плоть,
Заслышав слух весенний,
Что только-только распогодь,
Смерть можно будет побороть
Усиьем Воскресенья.

しかし夜中に獣と人は沈黙するだろう
春の音が聞こえ始めた後で
たったさっき天気が回復しようばかりに
死は超克されていくのだろう
復活の力を通じて⁷¹

この詩に復活祭は直接には書かれていないが、聖大土曜日という中間期を通じて、埋葬された肉体のイエスは、確かに死を超克していき、復活する。実際、「ゲッセマネの園」の最後に、この「復活」が予告されている。

Я в гроб сойду и в третий день восстану,
И, как сплавляют по реке плоты,
Ко мне на суд, как баржи каравана,
Столетия поплывут из темноты.

私は棺に降り、そして三日目に起き上がる

⁷¹ Пастернак. Т. 4. С. 518.

すると、筏が引川に流されるように
私の審判へ、キャラバンの船団のように
何世紀もが、暗闇から漂ってくる⁷²

磔刑によって死んだイエスは、この「三日目に起き上がる」によって、何世紀も生き続け、不死のキリストになる。「受難週に」と「ゲッセマネの園」両方とも、「中間期」が眼目である。正にこの「中間期」にこそ、生きているイエスから不死のキリストまでの転換の鍵が潜んでいるからだ。もう一度、『ドクトル・ジヴァゴ』の叔父ヴェジェニヤピンの言葉に戻ろう。

[……]歴史とは何か。それは、人間が死の謎に挑み、未来においてそれを超克しようと努めてきた何世紀にも亘る事業の樹立である。

ヴェジェニヤピンの言葉によって、その意味が明確になる。それは歴史という仕事、すなわち歴史化である。歴史化の過程を通じて、イエスという人間の信仰は救世主に対する信仰になっていく。「受難週詩篇」に見られる2種類の叙述は、その二重性の信仰に当て嵌まっていると同時に、より明確に「歴史化」という過程とパステルナークにおける「歴史」の意義を示唆している。

3.3. 「芸術」におけるキリスト

これまでの論述を通じて、パステルナークにおける主体と超越性の対立の意味は明確になったのではないだろうか。前節では、キリスト教徒の立場から「受難週に」のテキストを分析し、キリスト教徒の側から見たイエスからキリストへの「歴史化」の説明を試みた。本節では、「八月」という詩の分析を通して、詩人・芸術家のジヴァゴと、パステルナーク自身の立場に即して、テキストに幽かに表れている「芸術」におけるキリストを究明する。

3.3.1. 「旧暦八月六日」の意味

「旧暦八月六日」は、キリスト教暦でのキリスト変容祭である。シマンスキーによると、この日はマタイとルカの福音書に記載されているタボル山にてのキリストの変容を記念するという。⁷³ 実際、福音書にも次のような記述がある。「そして彼らの目の前で(イエスは)変容した。彼の顔は太陽のように光を放っていた。彼の衣装は光線のように輝いていた。そして見よ。彼らの前にモーセとエリヤが現出して、イエスと話していた。

⁷² Пастернак. Т. 4. С. 548.

⁷³ シマンスキー『典礼学』の第1部を参照。[https://azbyka.ru/otechnik/Germogen_Shimanskij/liturgika/10] 2021年5月24日閲覧。

[……]ペトロがさらに話を続けたとき、光っている雲は彼らを包んだ。そのとき、雲から声が届いた。これは我が愛しい子である。私の善意は彼にある。彼に従え」。⁷⁴

このような宗教的な記述は、パステルナークにおいてはどのように取り扱われているのだろうか。詩「八月」では、主体と超越性の対立が見える。つまり、ここにあるタボル山の引用は、「変容」という過程を経て、イエス・キリスト像における超越性を表現している。教徒たちはこの「変容」によって、キリストにおける超越性を認めながら、キリストに対する信仰を作り上げる。すなわち、キリスト教徒・キリストという主体・超越性の対立が形成されている。しかしながら、「八月」における主体は単なるキリスト教信徒だけではなく、いっそう深く、パステルナークと自伝的な連関をなしている。パステルナークの伝記的事実も考慮に入れながら、「八月」におけるキリスト像を解明してみよう。

パステルナーク研究者のフレイシュマンは、「八月」にはパステルナークの自伝的なもの(автобиографическое)が溢れていると指摘している。⁷⁵ この「自伝的なもの」を知るためには、詩人本人の自伝的散文や、あるいはその伝記を参照しなければならない。たとえば自伝的散文『通行保証書』(Охранная грамота, 1930)には、1903年夏に起きた悲劇についての、次のような記述がある。

[……]その後、私は足を骨折した[……]足にギプスをはめ、ベッドに横たわっていた私が微動だにしなかったとき、川の対岸にある知人の家が炎上して、田舎の甲高い警鐘は熱病に震えるように発狂していた。斜めになった炎の照り返しは揚げられた屎のようにぴんと張って、がたがた震えていた。照り返しは突然、たいまつ束を紙巻きタバコのように巻き上げ、とんば返りしてピロークみたいな赤灰色の煙に入り込んだ。⁷⁶

パステルナークの息子エヴゲーニー編集の『パステルナーク伝記資料集』には、1953年作の「八月」の元となった1903年の事故が記されている。ブイコフ⁷⁷とセルゲエヴァ＝クリャチス⁷⁸によるパステルナークの伝記も参照すると、どのような事故であったのかをより明確に理解できる。一連の資料によれば、1903年8月6日に、パステルナークは落馬によって大怪我を負っている。だが、当時彼が滞在していた村には医者が不在であったので、パステルナークは生死の間をさまようことになった。ちょうどその時、対岸に建っていた別荘(ダーチャ)から火事が起こったのである。そのような状況下であったが、パステルナークは奇跡的に一命を取りとめたという。

⁷⁴ 「マタイによる福音書」(17:2-5)。

⁷⁵ Флейшман, Л. С. Автобиографическое и «Август» Пастернака // От Пушкина к Пастернаку. М.: Новое литературное обозрение, 2006. С. 342-347.

⁷⁶ Пастернак. Т. 3. С. 510.

⁷⁷ Быков, Д. Л. Борис Пастернак. М.: Молодая гвардия, 2007. С. 25-28, 882.

⁷⁸ Сергеева-Квятис А. Ю. Борис Пастернак. М.: Молодая гвардия, 2015. С. 35-37, 347.

その他にも、「八月」の詩は最近発生した死に瀕する境目から生き残った事件を提示している。パステルナークがダーチャの窓から観察したパレデルキノの聖堂に祝祭された聖主変容祭は、彼にとつて、1903年8月6日に経験した彼が奇跡的に救われたという出来事とひとつに結びついた。その時の彼は馬から転落したが、不可逆的な終焉の感情とともに生き残った。1953年の10月、彼は病院でそれを再び経験した。⁷⁹

この2度目の瀕死の際に、50年前の「奇跡」を彼は思い出した。その「奇跡」は「キリスト変容」のように、彼に対して「顕現」の意味もある。1913年、パステルナークは「奇跡」から10年目の個人的な総括として、題目なしの草稿を残している。

私はその8月6日の災禍に遭った13歳の男の子を哀れむ。[……]その時からリズムは彼の出来事になって、そして逆に、出来事はリズムになる。旋律、音色と和声が、出来事の状況と物質になる。その日の前夜まで、確かに、私は創作のセンスを想像し得ないままだった。以前存在したのは、自分が体験される内的な知覚としてだけの作品であった。[……]ほら、私は彼を、そしてその1903年の曇天の秋を羨んでいた。私は、彼と楽譜との最初の付き合いを貴いものと見なしている。⁸⁰

この草稿を通じて、パステルナークはその「災禍」を、自分の創作経歴と関連させている。彼の創作経歴から見ると、確かにその奇跡的な生還以後、彼は正式にスクリャービンの弟子として作曲を始めた。そして、大学のサークルに入ったのをきっかけに、詩の創作を始めた。彼の書いている通り、その様々な「早期の感受」は畢竟、音符となり、文字となっていく。「八月六日」の変容祭には、パステルナークによって、宗教上の意味以外に、いっそう自伝的な色彩が加えられている。それは、芸術家になる前の彼に対する、芸術の顕現である。

3.3.2. 芸術の召喚というキリストの顕現：生と死の境目に

パステルナークの自伝的な「奇跡」の内容には3つの要素がある。それは、落馬による深刻な骨折と死に瀕する状況、火事による炎の印象と、芸術(音楽・詩)の幕開けである。一方、詩「八月」においては、死のテーマが前景化している。それは、夢に現出してくる死の感知である。朝に目が覚めた詩人は、「涙が滲んでいる枕」にぼんやりと頭を置いたまま、昨夜の夢のシーンを思い出している。

Я вспомнил, по какому поводу

⁷⁹ Пастернак. Борис Пастернак: Материалы для биографии. С. 616.

⁸⁰ Пастернак. Т. 5. С. 319.

李 博聞

Слегка увлажнена подушка.
Мне снилось, что ко мне на провода
Шли по лесу вы друг за дружкой.

私は思い出した。一体何のために
枕が微かに湿っていたのか
夢の中、私の葬式にくるために
あなたたちは森の縁に列をなしていた⁸¹

葬式に運ばれた詩人が、友人から冥福を祈られているシーンは、「ゲッセマネの園」で言及されている、死んでいるにもかかわらず意識のあるイエスのイメージを想起しうるだろう。死んだ詩人は自分の体で、その持ち続けている感受性で周りの環境を察知している。

С притихшими его вершинами
Соседей небо важно,
С голосами петушинными
Перекликалась даль протяжно.

В лесу казенной землемершего
Стояла смерть среди погоста,
Смотря в лицо мое умершее,
Чтоб вырыть яму мне по росту.

森の樹冠は静かさに包まれていた
隣接する空は肅々たる
鶏の鳴き声で
遠くまで長く響き渡った

森の中に県の土地測量女官のように
死は各々の墓地の間に佇んでいた

⁸¹ Пастернак. Т. 4. С. 531.

私の死顔を見つめながら
身長に合わせて私の墓室を掘ろうとした⁸²

自然の環境を知覚しながら、詩人は埋葬されていく。「八月」では、この埋葬という「中間期」を境目として、「死」のテーマが表されている。夢の中で死を体験するパステルナークは、50年前の事故によって瀕死のシーンを想起させられる。この生と死の境目に際して、詩人はもっと奇妙なイメージを見える。それは、あたかも主人公の死に伴って、「我が主キリスト」の変容が起きているかのようなイメージである。

Обыкновенно свет без пламени
Исходит в этот день с Фавора,
И осень, ясная как знамяеь,
К себе приковывает взоры.

いつものように焰のない光は
この日に、タボル山から発している
そして秋は、兆しのような明晰さで
自分に視線を打ち込んでいる⁸³

この「変容」を描いている一連は、「死」のイメージが多い「八月」において、「死」以外の要素がすべて現れているという意味で、きわめて重要である。第一に、「焰のない光」は火事による炎の印象と関連している。13歳時の炎上の光景と、タボル山におけるキリストの変容、これら二つはこの炎・光の形象に通じて、互いに結びついている。少年の時に経験した生と死の境目は、この関連で、キリストの変容という人と神の、主体と超越性の境目へと移行している。したがって、この生と死の間の何かが、主体と超越性の、死すべきものと不死なるもの間にある何かと、結び付いている。第二に、「兆しのような」秋である。聖書において「私の善意は彼にある。彼に従え」という神の言葉は、「キリストに対する信仰」を示し、キリストの完全なる神聖性を指摘している。ここに明言されている「兆し」はまず、超越性からの指導である。一方、パステルナークのコンテクストにおいては、その「兆し」はまた「芸術」の召喚とも解釈される。1913年の草稿に戻ると、「前夜まで」得ていなかった「創作のセンス」における想像は、確かにこの日からパステルナークの生に「打ち込まれた」のだ。この「顕現」や「召喚」によって、詩人パステルナークは自分自身を再び精査し、創造という目標を確立したのである。創作(творчество)とは、芸術・叙情性であるだろう。詩「八月」の主人公は、信徒がキリストの顕現によ

⁸² Пастернак. Т. 4. С. 532.

⁸³ Пастернак. Т. 4. С. 532.

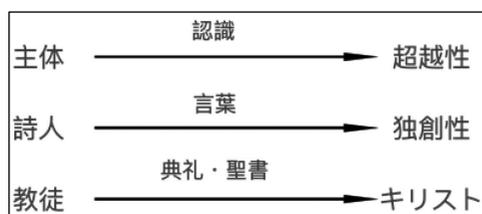
って神の超越性を認識できるように、死を体験しながら、秋の「焰のない光」で芸術の創造とは何かを知覚する。このことは、詩の末尾でも強調されている。

Прощай, размах крыла расправленный,
Полета вольное упорство,
И образ мира, в слове явленный,
И творчество, и чудотворчество.

さようなら、伸ばされる翼のはばたき
自由な飛翔の堅固なこと
そしてことばに現出する世界の形象と
創造と奇跡⁸⁴

世界の形象・創造・奇跡は、言葉に現れてくる。超越性の位相にあるすべてのものは、言葉の表現で我々の目の前に形を持ちつつ示され、我々に認識される——たとえば、歴史化されたキリスト像。生きていたイエスの軌跡は、聖書・典礼(歴史化の過程)の過程を経て、教徒の信仰の対象となる。歴史化されたキリストに対する教徒の関係は、超越性に対する主体の関係、独創性(創作)に対する詩人の関係とパラレルである。それは、図でまとめれば、次のようになる。

【図4】



そのとき、生と死の間の何か、主体と超越性との間、死すべきものと不死なる者の間にあるものとは何か。叔父ヴェージェニャピンの言葉をもう一度思い出そう。

⁸⁴ Пастернак. Т. 4. С. 532.

[……]歴史とは何か。それは、人間が死の謎に挑み、未来においてそれを超克しようと努めてきた何世紀にも亘る事業の樹立である。

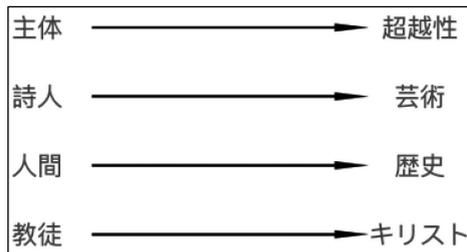
ここで語られているのは、「死の謎=死すべきもの」と「死の超克=不死なるもの」の「中間期」に潜在している何かであり、それが歴史と呼ばれているのである。

『ドクトル・ジヴァゴ』の中には、死と生の間にあるものを、別の語で言い表している箇所もある。それは青年時代のジヴァゴが、養母追悼会でひとり生と死の意義を考える場面の言葉である。

[……]芸術はいつも、止むことなく、2つのことに携わっている。芸術はねばり強く死のことを思考していながら、それを通じてねばり強く生を創造する。もっと多く言えば、真なる芸術は、『ヨハネの黙示録』と呼ばれているものと、それを補完するものである。⁸⁵

死を思考すると同時に、生を創造するものは、芸術である。死と生の間にある、あるいは、その両端を把握するのは、芸術だ。そして真なる芸術は黙示録である。「芸術」は死と生を把握し、『黙示録』を代表とする「キリストに対する信仰」をもとに「キリストの果てなき再来」を期待しつつ、定義しがたい未来における歴史の終焉へと進めていく。「歴史」は死と不死の内奥を研究し、『福音書』が証明する「キリストの信仰」から「キリストに対する信仰」への転換を基礎とし、「キリストの復活」を崇拝しつつ、「歴史化されたキリスト」を守る。詩「八月」の「顕現」を通じて、詩人は「芸術」というものを知る。「受難週」の「中間期」を通じて、教徒はキリストを記念し、信仰し、「歴史」の秘密を解明していく。したがって、先ほどの図は以下のように補完されることになる。

【図5】



⁸⁵ Пастернак. Т. 4. С. 92.

4. おわりに

以上の論考を通じて、パステルナークの痕跡が刻まれている「ユーリ・ジヴァゴの詩」におけるイエス・キリストの形象の意味が明らかになったことと思う。まとめよう。第1章「三位一体のイエス・キリスト像」では、まず神学の次元で三位一体の教義を試金石とし、神学的なイエス・キリスト像を破壊して、パステルナーク的なイエス・キリストを提示しようとした。その結果は、「父」のイメージが稀薄で、「霊」のイメージはほぼ存在しないが、「子」のイメージは顕著であった。第2章「生存者としてのイエス像」では、「受難」を眼目とし、それと関わっているイエスの「愛」と「予感」で、イエスの人間性、あるいは生存者のイメージを証明した。第3章「歴史化されたキリスト像」では、語り手の変化を説明し、歴史化という概念を解釈した。「受難週に」と「八月」のテクストを典礼学及び自伝的な材料を通じて、歴史化されたキリスト像に反映している主体と超越性の対立をより明白に究明した。

もちろん、紙幅の都合上、本研究では多くの論点を展開できず、したがって言及できなかった問題も少なくない。例えば、「受難週に」の最終2連目に明言されている「詩篇あるいは使徒」と「二重信仰」はいかなる関係にあるのか、また「現実主義者」における「感受性」と「責任感」は「ユーリ・ジヴァゴの詩」におけるキリスト像とどのように関わっているのか、などの問題である。資料面の不足も課題である。パステルナークの旧居に保存されている作者による書き込みのある聖書は、残念なことに、今回は確認できなかった。今後の研究において、それは間違いなく重要な一次資料となるだろう。そうした資料面の不足を補った上で、パステルナークにおける「現実主義」と歴史意識について、また「ユーリ・ジヴァゴの詩」の順序に関する諸問題は、また別稿で論じることにした。

(り) はくぶん)

附:連詩「ユーリ・ジヴァゴの詩」の構成

篇数	題名(訳文)	題名(原文)	イエス・キリスト の言及
1	ハムレット	Гамлет	直接 ⁸⁶
2	三月	Март	—
3	受難週に	На Страстной	間接
4	白夜	Белая ночь	—
5	春の悪路	Весенняя распутица	—

⁸⁶ 引用として役者—ハムレット—キリストという形象の統合体を構成するので、本稿の第3章第1節では触れなかった。

6	釈明	Объяснение	－
7	都会の夏	Лето в городе	－
8	風	Ветер	－
9	ホップ	Хмель	－
10	小春日和	Бабье лето	－
11	婚礼	Свадьба	－
12	秋	Осень	－
13	お伽噺	Сказка	－
14	八月	Август	間接
15	冬の夜	Зимняя ночь	－
16	別れ	Разлука	－
17	あいびき	Свидание	－
18	降誕祭の星	Рождественная звезда	直接
19	払暁	Рассвет	－
20	奇跡	Чудо	直接
21	大地	Земля	－
22	禍々しい日々	Дурные дни	直接・間接
23	マグダラのマリア I	Магдалена I	直接
24	マグダラのマリア II	Магдалена II	直接
25	ゲッセマネの園	Гэфсиманский сад	直接

образ Иисуса Христа в «Стихотворениях Юрия Живаго»

ЛИ БОВЭНЬ

Данная статья посвящена анализу образа Иисуса Христа в «Стихотворениях Юрия Живаго», 17-ой

части романа «Доктора Живаго» Пастернака (1890-1960). Мы рассматриваем особенности изображения Христа, отраженные в цикле стихотворений Живаго, чтобы доказать, что образ в цикле не был традиционным по христианским догматам, но был создан согласно представлениям автора, т.е. являлся Пастернаковским.

Мы начинаем анализ структуры изображения Иисуса Христа в цикле, отделяя Иисуса от традиционного представления образа Христа согласно догматам. Чтобы упростить процесс теологического анализа, мы проверяем соответствие с помощью спектра «Троицы», упрощенной как три образа (Отец, Сын, Святой Дух). Согласно текстам Евангелий и Символа веры, мы понимаем что в образе Христа сформирована следующая структура: Богом единым, Иисусом жизненным и Христом историзационным.

Иисус жизненный отражает любовь и предчувствие, особенно в стихах «Магдалень», имеющих интертекстуальные связи с «Pietà» Рильке. Христос историзационный представляет собой образ косвенный, с описанием которого ассоциирует теория «вера Христа» и «вера в Христа» немецких философов Мартина Бубера и Давида Флуссера. В таком случае мы видим, что концепция «истории» важна в романе Пастернака, и также, что важное для анализа Христа историзационного заключается в изменениях рассказчиков и интерпретациях «истории» в романе у Пастернака. «Историзация» также выражается в стихотворениях «На Страстной» и «Августе» как литургические факторы и синоним отношений между искусством и верой. В обоих случаях Пастернак исследует содействие субъекта и трансцендентальности.

Таким образом, можно отметить, что образ Иисуса Христа в «Стихотворениях Юрия Живаго» отличается особенной структурой Иисуса жизненного и Христа историзационного в них.